



平成26年3月3日

卓話 『 幸せの条件～よりよい人間関係の為に～ 』

奈良薬師寺 執事

大谷 徹奘 様

私のお世話になっている薬師寺はお墓を持たず、お坊さんは一切葬儀に触れません。何をしているかという、心を訓練する学校として建てられている。私1年に6万人から8万人の人に話を聞いてもらっていますが、毎日、毎日人を見続けて知ったのは、私たちが人に見せるこの顔は嘘付きだということ。小さな子供にも、人生を90年生きたベテランにも迷いはあります。その私たちが幸せになれるよう悟れるよう説いているのが人生のガイドブック、お経です。

そのお経の中のお経が般若心経。玄奘三蔵が命がけでインドまで取りに行き、帰って漢字に訳しました。このお経は観自在菩薩という仏様の名前から始まっていますが、実はこれは観世音菩薩、観音様の別名で、それまで観世音と訳していたのを玄奘が観自在と書きなおしたんです。

観世音とは世の中の音をよく観るということ。人間は自分ひとり空回りすることがある。外側にも心があることに注意しろと教えています。でも外側に指差すことは比較的私たちは得意です。人間には目や耳などの五感があって、そのアンテナは全部外向き。だけどその外側を指している指を、じゃあお前はといわれるとこれがやばい。玄奘というお坊さんはよっぽど真面目な人です。本当の仏教が欲しくてインドに出るんですが、当時の唐は鎖国していて、それを犯すと死刑だった。仲間と約束した出発の日には誰も来ない。裏切りから旅が始まるんです。砂漠の真ん中で死にそうになる。ヒマラヤを超えるときには仲間が目の前でバンバン死ぬんです。どんなに偉い坊さんでも、辛い、苦しいことが続

けば、なんで俺こんなところでこんなことをしてるんだろうって思った私は思います。その思いをしつこく求め続けることを、実は観自在といえます。物事が自由自在に見えるから観自在ではないんです。自分の在りようをよく観るということです。

一度しかない人生。私たちは迷ってばかりです。悟りは難しい修行をした人だけが得る境地ではありません。悟りは元々は自覚悟という言葉が原語。自覚も覚悟もこれです。その自覚悟を悟りと略しているだけなんです。その自覚悟をするために私たちは祈らなきゃいけない。祈るといのは凄く難しいので、私たちは意乗と当て字して勉強します。意は心の音と書きますね。だから仏教徒はこの字を心と読ませるんです。心の乗っている生き方ができる。例えば明日、大事な試験なり仕事がある。すると皆さんは前の晩まで一生懸命努めて、朝起きた時にさあやるぞと行く。それが祈りや生き方です。

お経の中に静観自得という言葉があります。自分を見つめて自分で得るというのではなく納得しろということ。人生は人にやらされるものではない、自分でこれだと詰めていくことができる。観自在、自覚悟、静観自得。この三つのタームをお考えいただきたいと思います。

ご縁を頂戴しまして、ありがとうございました。

